お米の復権／食料自給率向上の好機に

谷口吉光（秋田県立大学）

まもなく終わる2008年は世界の歴史に記録される年になるのではないか。食料不足、原油高騰、金融危機など何十年に一度、あるいは 100 年に一度という大事件が相次いだ。

しかし暗いニュースばかりではない。福田前内閣が打ち出した「食料自給率を 40%から 50%に向上させる」という政策などは、農家にとっては何十年ぶりのうれしいニュースだろう。

思い起こせば、去年の今頃、米はまだ過剰だと言われ、米価は一万円を切る水準まで下落し、稲作専業農家の経営危機を伝えるニュースが飛び交っていた。

それがどうだろう。春先からの世界的な穀物価格の高騰、途上国の食料不足、輸出国の輸出制限などが重なって、国民の間に「食料自給率を向上させなければ」という意識があっと言う間に広まった。最近発表された内閣府の世論調査を見ても、「食料自給率を高めるべき」という回答が 93%、「将来の食料輸入に不安がある」という回答も93%に達している。

これまで自給率向上に及び腰だった農林水産省も、従来の 45%という目標を一気に50%にまで引き上げた。これ以上低い自給率を放置すれば、国の食糧安全保障に支障が出ると判断したのだろう。

また不況のせいで外食が減り、家庭でご飯を炊いて手料理を作る人が増えているという。おかげで長い間減少傾向だった米の消費量も若干増え始めたようだ。首都圏のある生協は「お米を食べよう！」というキャッチフレーズで、「ごはん＋一汁二菜」（ご飯、みそ汁と２品のおかず）という「日本型食生活」を消費者に提案しようとしている。

注目されているのは主食用の米だけではない。小麦製品の値上がりを受けて、米粉（こめこ）が脚光を浴びている。もっちりした食感が魅力の米粉パンはあちこちのパン屋で見かけるようになったが、米粉を使ったケーキ、うどん、ギョウザの皮、天ぷら粉などが続々と開発されている。

また、輸入に頼っていた家畜の飼料に米を使う動きも各地で出てきている。餌に米を混ぜて育てた豚がブランドとして売り出されたと思えば、鶏の餌に米を混ぜると卵の黄身の色が白っぽくなることが消費者の新鮮な話題になっている。

米を食べることに関してこんなに前向きな話題が多いのも久しぶりだ。さながら「お米の復権」とでもいうべき光景が私たちの身の回りで浮かび上がっている。この高まりを目に見える食料自給率の向上につなげるためには、米粉・飼料米など非主食用米の生産に対する国の支援と、麦・大豆・油糧作物など土地利用型作物全体への生産支援が欠かせない。

日本農業にとって何十年に一度のチャンスをぜひ逃さないでほしい。

（朝日新聞「あきた時評」　2008 年 12 月 3 日掲載分を加筆・修正した）